資料４

委員事前意見一覧

1　SSTの目的

- SSTは、訓練実施場所のみならず、「関係者や保護者との連携のもと」、学校や家庭等、社会でソーシャルスキルを般化できるようにすることが重要。
- どこかに「集団の中での生活」という文言を入れても良いと思う。
- 対人関係に加えて、自分が困っていることなどを解決するスキル（たとえば、質問するなど）を身につけることも大切
- SSTで獲得目標とするスキルの決定においては、当人が希望するスキル、周囲の大人、支援者から見て必要と思われるスキルが一致する時と、一致しない時がある。
- SSTの学びだけで般化できるようになるのか疑問。現場では、様々な子供がいる中で、現場は信頼関係をどう作るかを日々丁寧に、苦労しながら関わっている。その中で、SSTを取り入れるということができるのか不安に感じる。
- ＳＳＴを受けることによって、児童と周囲がコミュニケーション取りやすくなる
- 児童期において使われていくことを踏まえると、もう少し子どもらしい表現や具体的な様子が示された方が、支援者やこれから児童期のSSTを学ぶ際に分かりやすいのかと思う。
- 必要な知識や適切な行動を学び、人間関係や社会活動を円滑に行えるようになること。
- 自己-他者の認識、自己理解、自己表現、感情調整、関係調整といった意味合いが含まれた方が、より良い。
- ソーシャルスキルトレーニングは、「日常生活」からトレーニングだと思いますので、「日常生活」という文言が入るともっと良いです。
- 現在の障害者や子供たちが置かれている社会的情勢を踏まえると良い。

2　SSTの効果

- 子どもがスキルを学び、身につけることで、人と関わることへの不安の低減、楽しさを実感する効果がある
- 保護者の中には、我が子への接し方に悩んでいる方もいるため、SSTが、我が子との関わり方のヒントになれば、それは効果だと思う。
- SSTの効果測定は大切であり、難しさでもある。効果を確認せずに行ってもエビデンスに基づかない実践となる恐れがある。効果測定をするのであれば、測定するタイミング、誰が測定するのかといった課題にどう取り組むかが大切。
- 一定の知的に高い障害児の場合は効果があるかもしれないが、SST＝自己受容や自己肯定感が作られるとは思わない。本人の特性の理解に関しては、一方的な偏った見方にならないようにする必要がある。
- 子どもは対応する大人によって変化する。変化や違いをどう理解していくかをSSTで身につけられるのか。
- 特別支援教室（発達障害の児童・生徒の通級指導教室）を利用した結果、子どもの性格が変わり、学校が楽しいと言うようになった。
- SSTは小集団で行われることが多く、小集団でないと効果は少ないと思う。他児・他者の視点、所属先の担当者という視点が必要。
- 効果として、①社会体験を積ませることで将来の見通しを持てるようになること、②信頼できる大人や関係機関とつながることで、自己肯定感を高めることが考えられる。
- 支援対象児の効果として、「相手を思いやる気持ち」が考えられる。
- 支援者側にとっても、本人の特性の理解が促進されることで、支援方法や声掛けなど、適切な支援につながる。

3　本人や保護者の理解の重要性

- 本人、保護者間でアプリなどを活用して、努力や達成度が見える化されるなどによって、家庭で親子が褒め合える関係を支援できれば良い
- トレーナーとトレーニーの参加への合意形成、目的の共有といったコミュニケーションは不可欠。障害児一人一人に必要なソーシャル・スキルは異なり、SSTで取り上げるソーシャル・スキルも変わってくる。今、当人にとって必要なスキルは何か、それを身につけるメリットは何か、SSTの内容、実施の流れなどを共有、合意してから始めることが、動機づけや効果に繋がる。
- 保護者に対して、事前の説明、合意等を得ておくことが、施設と家庭の信頼関係の形成と維持に繋がる。
- より具体的な目標を数段階に分けて設定する必要がある。
- 複数の施設を利用している子どもの場合、保護者は複数のフィードバックを受けることになるのか。統一した内容に事業所間で話し合いを持つのか。個別支援計画や面談で手一杯の上にトレーニングとフィードバックが追加されることは、かなりの負担になるのではないか。
- 特別支援教室の教員と毎回連絡帳で内容の共有や対面で目的や子供の様子を聞くことが出来た。
- 児童発達支援センターでは、定期的に母親参加プログラムがあり、療育の目的を説明していただきながら進んだ。実際に指導者の様子が見られるので、自宅等で実践する事が出来た。
- 療育の立場からは、発達支援という観点から、SSTは支援の側面の１つだと思っている。本人・保護者の理解の重要性については発達支援の考え方に含まれているものだと感じる。

3　本人や保護者の理解の重要性

- 同じプログラムであっても、ひとりひとりねらい（重点項目）は異なる。個々のアセスメントに基づいて、そのプログラムで何をねらいにするのか、どのような効果が期待できるのか、どのような負荷があり得るのかを事前に伝える。毎回のＦＢはもちろん必要だが、中間で効果の確認も行い後半の支援に修正をかける。
- 現在の障害者や子供たちが置かれている社会的情勢を踏まえ、解決すべき課題は何なのかについて、問題意識を明確にしたうえで、目指すべき将来像や望ましい姿について共通認識としていくことが必要。
- 保護者を中心に家族全体で対象児を理解し、一貫した対象児への関わり方が求められる。
- 短期目標や長期目標など、保護者が頑張りすぎて、対象児に過度な負担がないような目標設定が必要。

4　本人や保護者への理解促進のために行う取組

- 保護者の中には抑うつや不安が高い方、精神疾患のある方、経済的社会的な支援が必要な方もいる。保護者連携をする中で必要な方については、心理職やＳＷと適時連携しつつ進める。
- ケースによっては要対協との連携も視野に入れる必要がある。支援者に対する保護者の理解と連携のための研修も必要。
- 今子どもが学んでいるスキルの内容を、保護者とも共有した方が良いと思う。
- スキルを言葉や文章だけで伝えるのでは無く、イラストを分かりやすく表現したポスター教材、ICTを利用したオンライン教材なども開発して、使用すると良い。
- 子どもがスキルを使って何か出来たときに、保護者が褒める（強化）が大切。強化の仕方についても、保護者がどのタイミング（即時強化）、どのように声をかける（具体的に）かなども伝えた方が良い。
- 親を巻き込んで一緒にSSTをすると、親が自分の日頃の行動を振り返って、不足していたスキルを学ぶ機会になり、親にとってもスキルを学ぶ良い機会になる。
- ソーシャルスキル獲得するということは、具体的に言えば、例えば、社会という集団（活動）において集団の一員になることと集団の中においての自分らしさの確立ということなど、対象者等にわかりやすい具体的な目的目標が必要。
- 支援場所の見学会や保護者会、交流会があれば良い。
- ソーシャルスキル「トレーニング」、和訳すると訓練という意味については、それを必要としている児童の様子や行動の悪い面ばかりに注目する（○○ができない子のような）きっかけとならないように気を付ける必要もある。

４　本人や保護者への理解促進のために行う取組

- 発達障害自体も個性の一つであり、利用児の個性は得意な所や好きな事など全体像の意識が必要だと思う。支援者などは誤解なく理解しているものと思いますが、保護者に対して使う際には少し配慮があっても良いと思う

- ①アセスメント…個々の児童・本人の社会性に関わるアセスメント　（家庭や日常の様子）
- ②アセスメント結果の共有…保護者、所属機関等の担当者、年齢によって本人に対して
- ③効果の共有
- ④プログラムの全体像の説明　　年間計画、各回計画、ねらい、方法

- 本人の困り感、保護者の困り感、担当者の困り感から出発することが最も重要。困り感の「なぜ」が、ＳＳＴによってどう変わるかというイメージを持って取り組むことが、効果と般化を促進する。
- 当事者の声や願いに耳を傾けるという視点が欠かせない。
- 対象児への関わり方など関係者で共有ができるよう、保護者の同意のもと、支援記録を閲覧できる体制が必要。
- 資格、研修制度など人材の確保・育成が課題である。そのため、障害児通所支援事業の新規指定事業所は、都の説明会を受講するが、説明会または別の研修会でソーシャルスキルトレーニングについての講座を受講しても良いと思う。
- 支援者への専門家によるスーパーバイズが得られる機会を創出することが重要。

5　SST全般の課題

- ソーシャルスキルは広い概念なので、東京都で考えるソーシャルスキルとは、どんなスキルなのかを一般にわかりやすく、かつ具体的に示すことが必要。
- 適応状態や行動に対しては、本人の側のスキルトレーニングだけでなく、教室や学びの環境の見直し、子どもの特性の理解がまず必要で、そのような環境側の調整をまず行い、それに基づいて不適切な認知や行動に代わる、適応的なスキルの学習が必要ということを伝えてほしい。支援者のガイドライン、養成、スーパービジョンができる体制について整えていく必要
- 一つは、放課後デイの利用者の年齢は広いので、発達段階を考慮する必要がある。小学校低学年と中高生ではSSTの内容や進め方が違ってくる。
- SSTを実施するトレーナーの育成が必要。①ソーシャル・スキル理論的背景やSSTの実施方法を理解している、②実際に子どもにやってみる段階で、一人では無く、複数のメンバーで取り組める、③トレーナーがSSTをしていく中で、難しさにぶつかったり、自信がなくなったりすることが必ずあるので、相談できる人（スーパーバイザーのような存在）がいる方が良い。④上司、所長のSSTに対する理解と先導的役割があると進めやすい。⑤各事業所で、SSTを定期的に継続的に実施するための時間をいかに確保するかの検討が必要。⑥同時に、トレーナーの研修、実際にSSTをやってみたふり返りと共有の時間も取れると望ましい。
- SSTが全ての子どもにあてはまるのか疑問。重度の知的障害の子どもの場合、まずはしっかりと信頼関係を築くことが必要で、それなしにSSTをする意味があるのでか。SSTを取り入れなくても、人との関係作りや表現方法を身につけることはできる。

5　SST全般の課題

- ＳＳＴを希望しても、すぐ受ける事が出来ない・放課後等デイサービスの場合、ＳＳＴを意識している施設は少なく、預かり型がメインである。
- アセスメントの難しさがある。
- コミュニケーションや遊びなどが共有できるグループを作ることの難しさ
- 対象児ごとに合わせるために幅広いアイデアや、知識、技術が必要な点
- 支援者と利用児の信頼関係が十分に育っていることが必要な点
- 放課後等デイサービス事業では、放課後の場合は時間を確保することや、子どもによっては疲労など力が発揮しにくい場合もある。
- 重要かつ難しいと思われること

①実際の生活場面、社会場面における般化　②効果の持続　（フォローアップ）
③年齢に応じたプログラムの体系化（幼児期から成人期）
④発達特性、行動特性、心理特性に合わせたプログラム、あるいはプログラムの調整
⑤SSTの効果は、周囲の大人の理解と姿勢に大きく左右される。そのための手立てが必要。

- SST普及協会など、現状でも普及活動に取り組んでいる所もあるため、そのようなところの意見を聞いても良いと思う。
- SSTについて、世間への周知がまだ行き届いていないため、具体的な支援方法や内容について、関係者でもわかりかねる部分もある。そのため、関係者や支援が必要な方にSSTの具体について、周知をされると良い。

6　その他、検討会に対する意見

- 東京都が従来行ってきたSSTの委託研修会を今年度も行う際に、このモデル事業を行う案を示し、関心のある放課後デイの職員を特に選んで研修を行ってはどうか。従来の研修時間よりも長くして、少数精鋭の職員の訓練を今年から着手すると来年度からの計画が円滑に行くのではないかと思われる。
- 机上で学ぶこと、場面設定の中で学ぶことが本当の力になるのかが疑問。こういう時は、こうする方がいいという決めつけでは、子どもは救われないのではないか。
- 小・中学生でSSTを受けられるのは特別支援教室がメイン。特別支援教室の調査を行ってはどうか。
- 小学校特別支援教室はＳＳＴメインでＬＤ児は対応しない自治体があります。福祉保健局でLD支援検討委員会のようなものが出来ないでしょうか。
- SSTは、家族・学校・事業所などチームで取り組む課題であると捉えている。そのため、教育・医療・福祉が連携し、一体的に進める必要がある。
- 障害児通所支援事業の新規指定事業所（法人）や現在営業している事業所に対して、SSTの講座の受講の位置づけをどうするか。
- 放課後デイサービスで、本格的なSSTを提供できる社会資源の実現化に向けて、期待したい。